

目的 現在40歳代、50歳代の中年層は、我が国が高齢社会になると予測されている21世紀に高齢期を迎えるが、現在の高齢者とは異なった生活背景をもって生活を築いてきており、高齢期の生活を設計するには新たな視点を必要とするであろう。一方、21世紀の高齢社会の支え手となるのはその子どもたちである。そこで、中年世代の夫婦が、どのように高齢期の生活設計について考えたり取り組み始めているか、またその子どもたちは親の老後の生活や高齢化社会についてどのように考えているか、すなわち中年世代夫婦の高齢期の生活設計の状況と課題について、親子両世代の目から明らかにする。

方法 1991年11月下旬、横浜国立大学教育学部の家政学専攻および生活教育コースに所属する1年生から4年生までの学生の親（142名）を対象に、アンケート調査を郵送で実施、133名から回答を得た（回収率93.7%）。一方その学生には1992年2月、大学の授業などでアンケート調査を実施し、126名から回答を得た（回収率88.7%）。なお、そのうち親子双方の回答があり、夫妻がそろっている117ケースを分析する（分析率82.4%）。

結果 調査対象家族の主な概要をみると、夫の平均年齢52.7歳、妻49.2歳、夫が雇用者は67.5%、自営業と自由業で24.8%、子どもの平均人数2.31人、年収は800～1000万円未満が27.4%、1000万円以上41.9%、持家率92.3%である。親世代は、老後生活について健康と経済の面においてもっとも不安や関心をもっており、自由時間・余暇や人間関係に関してはそれほどでもない。しかし後者についての問題もなくはないのであって、健康や経済などの面とともに生活時間や人間関係・家族関係などの面をさらに意識的に組み込んで、高齢期の生活設計を総合的に考える必要のあることが示唆された。